

令和俳句論考

廣瀬 茂雄

父の日の大樹の風に眼をつむる
心臓は今日も動いてゐる炎暑

吉田 成子

（第四句集『昨日今日』より）

作者は八十九歳、句歴は六十年以上に及び、「俳句があったこと、俳句の縁で多くの仲間との交流があったことで今日の私がある」とあとがきで述べている。改めて俳句というものの力を思う。

一句目、強い風で思わず目をつむってしまった。しかし、ただそれだけではないだろう。作者は風に揺れる眼前の大樹のように自分の父の大きな存在を眼裏で思い出しているに違いないのだ。

二句目、昨今の異常な暑さは未曾有のものである。扇風機だけでは不十分、冷房が必須の時代になってしまった。掲句はそんな時代に生きる高齢の方の実感だろう。俳味もある咬きの句だ。

氏は「草樹」発行人・編集長を経て現在会員

日面に手締めありけり達磨市

木村 有宏

田の果ての富士のみ白し松の内

（第二句集『瀑布』より）

あとがきに「韻文精神の徹底」、「俳句は生活そのもの」と、石田波郷の直系らしい言葉がならんだ後、「俳句を詠む楽しさが加わった」と述べる。確かに氏の楽し気な生活全体が見えて来るような句集である。

一句目、達磨市は関東圏では高崎と調布が有名だが、そのどち

らかの光景だろう。（作者は埼玉在の方）縁起物の達磨を売っている市での手締めは、願いが成就したことを祝う光景か、それとも目を一つ入れた後の、これからの一年を期する、気合の手締めだろうか。上五の「日面に」が効いた明るく力強い句である。

二句目、荒涼と広がる冬田の向こうに雪をいたいだいた富士山が見える。松の内という季語で、正月のおめでたさの点景としての富士の姿が座りのよい存在として伝わってくる句である。

氏は「鶴」編集長

爽秋や新目しるく心柱

池田 瑠那

牛乳瓶蓋ポと開きぬ涼あらた

（第二句集『心柱』より）

句集名にもなった心柱とは建築物、特に仏教塔の内部の中心となる柱のこと。あとがきで作者は山形の羽黒山五重塔の百五十年ぶりの御開帳で、吹き抜けになった内部の心柱を見て、「常に何かに急ぎ立てられるような時間観から解放された」と述べている。

一句目は、その折の句。鉦（ちような）とは、木材を荒削りする鋏に似た木工具のこと。作者は心柱に残る鉦の跡に心を動かされた。心柱は外から見えないため、仕上げされておらず、それ故に、鉦の削り跡が室町時代を生きた当地の人々の息吹を今に伝えていたのである。「爽秋」という季語の響きも心地よい。

二句目、懐かしい昭和の光景である。今でも瓶で売られる牛乳はあるのだろうか。中身を密閉するため、丸蓋は瓶入り牛乳にはなくてはならないもので、紙製の厚い蓋の表面には、ちよつとし

たデザインと商品名が印刷されていた。開ける時の小気味よい音は掲句の通りで、この音も日常生活の中から消えて久しい。

氏は「澤」同人

寒いさみだれ紫陽花の色はじまる

板倉ケンタ

すでに秋風炎熱の雲ひとつ

(第一句集『二花一虫』より)

作者は二十六歳。中学二年から作句を始め、俳句甲子園では三年連続個人優秀賞、また石田波郷新人賞他二つの新人賞も受賞している。写生を踏まえつつも、句集には挑戦的な句が多く並ぶ。

一句目、季重なり、句またがり、字余りの句ではあるが、ひらがなの使用、散文的表現の効果もあろうか、一読、違和感がなかった。「寒いさみだれ」という韻を踏んだ大胆な表現を、これから青や紫系統の様々な色を楽しませてくれる紫陽花の季節の〈序章〉としたことを、作者は読者に問うているのだ。

二句目も季重なりだが、昨今の異様な長さの残暑で、このような光景は現実のものとなっている。作者は秋風と炎暑との奇妙な同居を眼前の事実として一句に纏め、読者に突きつけている。將來こんな季節感を表現する新たな季語が生まれるかもしれない。

氏は「群青」「南風」所屬

折り鶴を開けば四角ひろしませ

栗原 公子

梅真白このうへ何を捨つるべき

(第二句集『折り鶴』より)

あとがきで作者は、八十歳を過ぎても俳句に飽きることがなく、その奥深さ・難しさに呻吟しつつも益々俳句が楽しい旨を述べている。日常詠を中心に軽やかな句が並ぶのはそれ故だろうか。

一句目は、句集名にもなった句。四角の色紙を折って鶴にする

という普通の行為を逆にした。いわば折り鶴の〈種明かし〉をしている訳だが、そのことで、上五中七は感傷とは無縁のものになった。そして下五を「ひろしま息」と漢字でもカタカナでもない平仮名で表記した。句から深刻さを排したことで、かえって作者自身の〈広島〉への強い思いと祈りを感じるのである。

二句目、満開の白梅の姿を何もかも捨て去った後の姿と見たのか、或いは白梅に触発され、中七下五の措辞を自分自身に向けたのか……。「白」という色のイマジネーションが生んだ句だ。

氏は「沖」同人

結ひたるは丁寧な人粽解く

森 雅紀

冬の蜂昨日の窓を離れざる

(第一句集『出立』より)

作者は大学時代より俳句を始め、医業に従事しながら米国での生活も経験し、現在は浜松に居を構えている方である。広大な国土を背景にした海外詠も多いが、掲句は日本で詠まれた句。

一句目、人を診る仕事をしている方らしいユニークな視点で詠まれた句。粽は余程しっかりと几帳面に紐で結われていたのだろう。最初は真剣、次第に苦笑い、ようやく解けて安堵、そんな表情の変化も目に浮かぶ、可笑しみのある句である。

二句目、冬の蜂は力なく見える。逃げる気配もなく、日溜りてじつとしていることも多いため、妙な親近感が湧いたりする。掲句の蜂は窓の縁に止まり続けているのか、昨日の光景のままと言うのである。この場所が気に入ったのか、もう飛ぶ力もないのか。写生句だが、作者の優しい眼差しも伝わってくるようだ。

氏は「ひいらぎ」同人

(筆者住所 〒444-0842 愛知県岡崎市戸崎元町九一七)